

北海道師範塾 「教師の道」 塾頭通信

第742号 平成26年5月27日

誕生日を知らない女の子（2）

「誕生日を知らない女の子」では、足は水虫だらけ、頭や体の洗い方さえ知らないという児童養護施設出身の「拓海」という男の子の話が出て来ますが、一部とはいえ、本来子どもを守ってくれるはずの児童養護施設で児童の虐待が行われている事は、決して許されませんし見逃してはならないと思います。

また、「拓海」君は、発達障害を抱えているのですが、この「拓海」君が学校で他の子と口げんかした際、担任の女性教師が「拓海」君を後ろから羽交い絞めにするという出来事が起こります。その瞬間「拓海」君は恐怖に駆られ、条件反射的に教師の顔面を殴ってしまいます。被虐待児は後ろから押さえられると大きな恐怖を感じるものなので、決してやってはいけない行為なのですが、殴られた教師はショックの余り退職という事態にまで発展します。

問題なのは、その際の学校側の態度です。学校では「拓海」君を問題児として学校から追い出そうとします。これに対して里親が、「彼が暴力的な行動を取る様になったのは、社会がそうさせたのだ。彼は被害者だと思っている。だから、社会や大人の側が引き受けてあげなければいけない。虐待を受けた子の特性として、背後から押さえられた場合、恐怖を感じて反応する事があるので、その事をわきまえて対応するのが学校側ではないか」と述べたのに対して、学校側が発した「われわれはプロではないですから」という一言には、唾然とするばかりです。

黒川祥子さんは、この学校の対応に対して「特別な支援を必要とする子どもたちに対して、指導者が『プロではない』といい切る。これはいったいどういうことだろう」と疑問を呈しています。

厳しいいい方をすれば、学校も教師も、逃げてはいけないという事に尽きるでしょう。そのためにも、学校や教師はもっと特別な支援を必要とする子ども達の事を知る努力をすべきです。

黒川祥子さんは「沙織」という女の子から「無条件に子どもを愛しているのか」と問われ「二人の息子を愛する事に条件はない。そういうことを考えたこともない」と回答すると、彼女から「愛するのに条件なんてないよね。私は『無条件』の意味を、検索して考えないとわからない」と言って来たそうです。

「愛して欲しい、守って欲しいと心から願う存在から、愛され、守られ、大切にされた記憶が欠片もないとしたら、なぜ生まれて来たのかがわからない。この世界

にすがりつく一本の糸すらないのなら、どうやって生きていけばよいのか（「誕生日を知らない女の子」から）という叫びは、虐待を受けて来た子ども達に共通するものだと思います。

黒川祥子さんは、「一体どれほど、子どもの側に立って虐待を見ていたのだろう」と述べていますが、その事が「誕生日を知らない女の子」を書く動機だったようです。時に目を覆い、耳を塞ぎたくなる衝動にかられますが、「子どもたちの現実から目を逸らしてはならない。それが『子どもの側』から虐待を見て行くという視点だ」という彼女の指摘は、胸に重く響きます。（塾頭：吉田 洋一）